



第185号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長
市川貞夫
編集人 会報編集委員
市川武彦
印刷所 須坂新聞社

二千年紀に

気概を持って立つ

上高井教育会副会長 浅沼彌吉

今年、二十一世紀を生きる子ども達を育てるための新しい教育の創造に向けて大きく方向を定めた年でありました。新教育課程の制定がなされました。移行措置の大綱も示されました。十二年度の各校の教育課程が、その方針に従って立案されています。今まさに教育の大きな変革期に私たちは立っているわけです。二十一世紀の教育に迎えられる教育計画の方向づけをしていく責任を負っています。

この教育の改革は、同時に教育の危機、子どもが危ないといわれる背景を踏まえて進められているものであります。また、明治維新(王政)、昭和維新(民主)に継ぐ第三の平成維新(IT)といえるよう

な時代の推移としての社会的な変革を踏まえて進められていることも認識できます。そういう状況の中において、上高井教育の中心講師として長年ご指導戴いている谷川先生が自ら研究授業をして下さるといふ画期的な研究活動がなされました。那研活動に大きな活力・エネルギーを与えていただき、感謝に絶えません。私どもは、先生から与えられたこの活力・エネルギーを、またその心意気を正面から受け止めてこれからの実践に生かしていくべきです。

変動し、課題山積する中にあって、「危機管理」という言葉がよく使われますが、私はこれを守りの姿勢で受け止めてはならないと考えています。教育をしていく者にとって、事無かれ主義的に無難に乗り切ろうとするような受け身の姿勢では流れに飲み込まれる結果になることは目に見えています。

変革期にあってはどういう人が活躍しているか。歴史に学ばなくてはなりません。それは、創造的・挑戦的に生きた人達です。明治維新においても昭和の変革期においても然りでしょう。今それと同じような状況にあります。創造的気概のある教師の下に、独創的に逞しく未来を切り開いていく子どもが育ちます。

私たちは、未来を創造する大きな気概を持って明日の上高井教育を創造していかなくてはならないと考えています。

(小布施中)

本校の中核活動

児童会祭り

高山小学校

今年度本校児童会では、前期と後期に一日ずつ「児童会祭り」という行事を行いました。児童が主体となり、企画、準備、運営することで自主性や活動への意欲、協力し合う態度を養い、全校で仲良く楽しめる時間をという願いのもと計画されたものです。各委員会毎、先週の児童会の時間に話し合い、子どもたちの願いを元に、準備がすすめられました。

今年度本校児童会では、前期と後期に引き継がれました。後期(12/4)は、クラス毎お店を出したり、クラスの中核活動の発表の場としてのお祭りとなりました。そのクラス毎の特色が表れたものでした。一年生では、そば作り学習の成果として、そば作りの実演やそばについてのクイズがあり



ました。五年生のあるクラスでは、年間通して取り組んできた昔ながらの米づくりについて、道具や作業の仕方を紹介するなど、子どもたちの体験学習がしっかりとめられていました。前期と同様に、全校の子どもたちが楽しみ、さらに学ぶことのできるお祭りとなったと思います。子どもたちの感想を見ると、数多くある学校行事の中でも一番心に残っていると書かれているものが多くありました。

二回の児童会祭りは、当日はもちろん、企画、準備をしてきた中でも、子どもたちにとって、心から楽しみ、学ぶことの多い経験となったと思います。学校教育も様々な面で変革されるこの時期、来年度以降どのような形で児童会祭りを継続していくか、他の行事と統合できないか等、多くの課題も残されています。しかし、子どもたちが生き生きと活動できる場を今後も残していきたいと思っています。

(竹内克彦)

教育会だより

- 12 第8回同好会
 - 11 第2回研究委員会世話係・委員長会
 - 11 第9回同好会
 - 11 第2回同好会世話係・委員長会
 - 11 第6回研究小委員会
 - 11 第7回同好会
 - 11 第7回同好会
 - 22 第7回代議員会
 - 22 第8回常任委員会
 - 22 第8回常任委員会
 - 22 第8回代議員会
 - 22 第8回代議員会
 - 29 第8回代議員会
- 上高井教育会報185号発行
第8回代議員会

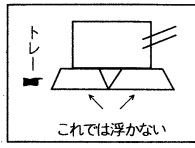
驚くべき出来事

佐藤 綾子

谷川先生にご指導いただいたのは、三年生「物と磁石」の単元で、子ども達に個別実験をさせる授業だった。

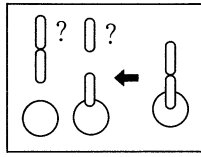
前時、船やUFOに磁石を近づけると船が動いていたりUFOが回ったりする時、船やUFOの中の磁石はどうなっているのかという学習問題を設定した。

本時、T男はトレレーを2つつなげ、中庭の池に浮かべようとしていた。2つのトレレーをセロテープで接着するのに手間取り、実験時間のうち、十分が過ぎていった。トレレーは逆さま。授業者は、ひっくり返し接着したらとアドバイスした。T男は慌てて接着し中庭へ直行した。谷川先生も続いて中庭へ出ていかれた。授業者は、その後のT男の動きを窓から見て実験が進行しているかどうか様子を見るのが精一杯であった。



中庭の池でT男は調べようとしたが、トレレーを下向きにしたため、沈んでしまい実験は失敗寸前。意欲がもたなくなりそう

谷川先生から出された問題をきつかけに、私は、子ども達の驚きの世界と同じ位置(子どもと同じ目の高さ)に自分を置くことができた。(森上小)



教え子との出会い

林 順子

十月二十六日、今年度の信教全県大会に参加させていただきました。会場は、私が初任で御世話になった飯山市の第二中学校でした。木島小と一緒に音楽を勉強した子ども達が中学三年生になり、どのように成長しているか、楽しみにして出かけてきました。私が知っているのは小学校三、四、五年の時の彼等であり、実際に音楽や家庭科の授業を持ったのは、四、五年の二年間だけでしたが、夏の吹奏楽コンクールで顔を合わせた時

に、数人の女子や、保護者の方が声をかけて下さいました。

大会が始まり、来賓で紹介された飯山市の教育委員長さんは、当時の校長先生でした。そして、会場校の高橋校長先生は、音楽同好会で御一緒させていただいたこともあり、懐かしく思いました。

さて、実際の授業を見せて戴いて、二中は、飯山小の一年部の生徒と木島小の全ての生徒が通学するので、中には、知らない子もいました。

分かんなかったのか、あるいは記憶に残らない教師だったのか、どちらにしても、分かってもらえなかったのは、残念でした。

授業が終わる、授業者の先生が、参観者に「一緒に歌って下さい。」と言われ、大合唱となりました。子ども達にとっでは、いい刺激になったのではないのでしょうか。

この授業を通して、いいなあと思った点がいくつかありました。一つは、グループ練習の時、指揮者をたてた事。もう一つは共通楽譜を見ながら歌わせただけです。

私も日頃、合唱指導をしていますが、是非、参考にしたいと思えました。そして、大きく変わった子を見て、時の流れを感じた一日でした。(高山中)

伝えたい・聞きたい・通じ合いたい

川本 修一

本校では、子どもたちの興味・心の高まりから出発する中核活動を学級ごとに設定し、そのうえで、各教科との年間を通してのクロスカリキュラムを図りながら体験の中から問題を解決学習を展開していく学習「総合学習」に取り組んでいる。

本校国語科では、子どもたちの健全な人格形成のために、音声言語によるコミュニケーション

ン能力を身につけさせたいと考えた。子どもたちを取り巻く言語環境の変化を思うとき、音声言語による意志の伝達、相互理解、合意形成を図る力を身につけさせることが国語教育としての責務であると思いつからである。

一年竹組では、中核活動として、朝顔の学習に取り組んだ。開花時期も終わりつつある。子どもたちは、押し花にし

たり種を集めたりと、思い思いに別れを惜しんでいた。そんな中、A君が作り上げた朝顔の模型は、子どもたちに強い関心を持って受け入れられた。そこで、教師は、朝顔の模型の作り方を多くの人に伝えようとする活動を通して、コミュニケーション能力を高めた」と考えた。

一年生を支えてくれる良き聞き手としての存在である六年生との異学年交流の中で、対話能力の育成を図った。一年生から、折り紙の花の作り方を教わった六年生が「立派な先生です。三角の角を合わせるところが上手に言えたね。」とその教えぶりをほめてくれた。一年生の顔が誇らしげに輝く。

(須坂小)

振り返って

今こそ、子どもの良さを

見い出そう

新津朋典

私は、昨年の四月から二年間の貴重な研修の機会を与えていただいた。この研修では、今までの教職経験の見直しと、教師としての役割や子どもに對する見方を広げる事を目的として、取り組ませていただいている。主な研修内容としては、修士論文の作成と、講義

要因を明らかにする事で、日常教師がどのような事に配慮しながら指導に当たって行くことが、いじめの発生を予防することに役立つのかを提言できるのではないかと考えている。論文については、現在進行中の事なので、この程度の報告とさせていたたく。

次に、講義の中から自分が参考になったものを報告させていたたく。それは、「教師としての子どもに對する姿勢」についてである。カウンセリング関係の講義や演習を通して、「子どもを自己成長力、自己決定力を持った存在として認め、信頼する事の大切さ」を学んだ。(もちろん、おだてや甘やかしと言った受容・共感のはき違えは許されない)そして教

師は、子どもの良さ、持ち味を開発したり、SOSを発している子には「心の傷を癒す」ような生徒指導を日常の教育活動において心がけなくてはならない事を学んだ。昨年までの自分を反省してみると、毎日の忙しさに紛れ、一人ひとりを大切にしていなかったことに「はっ」とさせられる思いであった。子どもたちの心に寄り添える教師でありたいと思った。

間もなく上越教育大学での研修の一年目が終わろうとしている。研修で学んだものを現場においてどのように生かしていくのかを考えながら二年目の研修に励みたいと思う。ありがとうございました。(日瀧小)

めいせい!

GTK

河西茂信

四月に小布施町に赴任し、教師生活がスタートしてから、早いものでもう一年が経とうとしています。

三月まで学生で、四月からいきなり四年生の担任をするという事で「自分にできるのだろうか」という不安と緊張感に包まれたスタートでしたが、そんな気持ちはクラスの子供たちの明るさと元氣

の良さに吹き飛ばされました。まもなく、子供達のパワーは、「ドッジボール」に向けられていきました。「ドッジボール大会に出たい。」という発言がきっかけとなり、十月と一月の大会に向けて練習が始まりました。教師が押しつけたのではなく、子供達の興味から始まったことなので、みんなが意欲的に取り組むことができました。練習を始めて以来、子供達は毎朝早くから練習したり、休みの日も友達や家の人とキャッチボールをしたりと、真剣に取り組んできました。六年生と練習試合をし、たまには勝つこともできるようになってきましたが、大会では不本意な成績に終わってしまいました。子供達の気持ちの中には、「来年こそ。」という目標ができています。このドッジボールは、クラスの中核活動としてなくてはならない活動として、クラスに定着してきました。この一年間でわからないこと、悩んだことも数多くあり

ました。その一つに、不登校児童への対応の仕方です。七月頃から学校にあまり来ることができず、来ても保健室に行ってしまう子供の気持ちを理解できず、何をしたら良いかわからなくなりました。そのような時は校長先生をはじめ教頭先生・指導の先生、同じ初任の先生方など、数多くの人に支えられて、何とかやっていくことができました。

この一年で経験した事、初任で学んだ事を活かして、一人前の教師になる様に、努力していきたいと思えます。(栗ヶ丘小)

本校の宝²⁹ 地域の方も参加する全校登山

高甫小学校

♪朝夕仰ぐ、明德に
見せるこの意気 全校登山♪
と校歌に歌われている。
この全校登山は、学校目標「あすの日本を担う子ども」強く、かしこく、豊かな子ども」の具現の重要な柱であると同時に、高甫の宝となってきた。

また明德山に登ったことがない。私達も登りたい」という声を、「学校・家庭・地域との連携」に生かし、保護者の方二十七名にも参加していただいた。

平成十年度には、PTAとの共催にし、地域の方々にも参加を呼びかけ百名を越す参加を得た。登山後、子どもたちと地域の方との手紙のやりとりやスズムシを通じた交流も生まれ、「全校登山ふれあいの集い」が地域の方と実施された。

今年度は、卒業生や須坂技術学園・育豊園の方々、そして七十才を越すご婦人までと幅広い人々が集う全校登山へと発展した。

実施にあたっては、登山道の整備や樹木の名札作り・山頂に建てる標柱作り、更には仮設トイレの設置や給水タンクの輸送等、PTAの役員会や学校・家庭・地域の三者で構成されている高甫ふれあい委員会の方々の、ふるさとに寄せる熱い思いと協力を惜しまない汗に支えられている。朝夕仰ぎ見るふるさとこの山。そこに共に語り合い、汗して登った体験こそ、人生を支える大切な宝となるだろう。(山岸信之)



昭和三十六年以来、本校の南側の聳える標高二一九三・五米の明德山をはじめ大洞山・竹ノ城址に毎年登山が実施されてきた。

「高甫にお嫁に来た私たちは

火ばら談義



相森中 小林浩一

さつまいもくん、万歳!

西井恵美子

自分が予想したように子どもが反応してくれるのは、うれしいものである。

「今回は、やきいも、冬には、さつまいもを作ろうよ。」こうして、おいもバトルは終結したが、その後の子ども達の活躍もすごかった。放課後、家の回りや臥竜山の落ちていく小枝や枯れ葉を集めてきてくれた。また、友達の後からついてくることの多い、恥ずかしがり屋の女の子が、一人で自宅の隣の製材所へ行き、木切れやおがくずを分けてほしいと頼んでくれたのだ。その子が、朝一番に私の所へとんできて、頬をまっかになら、「隣のそばちゃん、好きなだけ木をくれるって。やきいもできるね。」と言った姿が忘れられない。

今年、姉妹学級の五年生と一緒にさつまいもを作った。収穫したさつまいもを、さつまいもにするか。やきいもあたりにするなり落ち着くだろうと私に思っていた。しかし、事はそれ程単純ではなかった。子ども達は、やきいも派と、さつまいも派の二つに分かれた。双方とも言い分があり、両者一歩も譲らずの、「おいもバトル」が続いた。さつまいもは、確実に火がおこせるのか、とやきいも派に詰め寄った。やきいも派、しばし沈黙の後、五年生に相談したいと提案。相談の結果ある五年生が、お手伝いを買って出てくれた。形勢逆転。遂にさつまいも派は、妥協案を出

(小山小)

体の不思議

佐藤富美子

一学期、学級で「新体力テスト」を行いました。

項目は①握力②上体おこし③長座体前屈④反復横とび⑤20mシャトルラン⑥50m走⑦立ち幅とび⑧ソフトボール投げです。その結果を見ながら、学生の頃の自分を思い出しました。運動方法学の実習。思いきり投げたはずのボールが、さほど遠くへ飛ばず、肩だけがから回りしているような感じ。腕を曲げたまま助木にぶら下がると二秒で腕が伸びきってしまい、

一体どこに力を入れればいいのか分からない有様。今考えると体を動かすことに少しは自信があったあの頃でさえ、無意識に全く使わない筋肉や神経があったことに気がきます。動かし方を体験(学習)していないと、いざ使おうとしても思うようには動かせないものですね。そんな私でも、三回目の実習になると10秒ぐらいはぶら下がれるようになっていたのでやっぱり体は不思議です。

が一回もできなかったA君。毎日々食の後に「足上げ」の運動を続けたそうです。半年ぐらいいして「もつでできるようになったよ。」と言つので、試してみようと、記録12回。とてもすごい変化です。それまでA君の様子を見ると、どこか動きがぎこちないなあとという感じを受けていたのですが、最近、動き全体に芯が入ったようにも見られたのは、そのせいかもしれません。

未知の可能性、不思議な力を持つ体。いろいろな運動体験を積むことで、眠っている筋肉や神経を目覚めさせ、バランス良く体力をつけていくことができると思うと、外遊びの少ない子供達にとって、学校生活の中での運動経験はとても大切な時間なのだなあと思うこのごろです。

(井上小)

自分を認めて

斉藤礼子

『あなたは「バラは美しいが棘がある」とみませんかそれとも「バラは棘があるが美しい」とみませんか』

私に大きな課題を投げかけた大好きな言葉のひとつです。

東中にきて一年が経とうとしています。山間地と言われる東の子ども達もやはり現代っ子です。スポンを下げて、赤や青のパンツを見ているのはやりのようです。「むかついた」を口にしたり、破損物を作りストレスを解消するのも今風に見えます。身体の方も今話題の喘息・アトピー・腰痛・生理痛で悩み、多くの子どもが

保健室を訪れているのが現状です。しかし、話せばわかる子ども達です。スポンを下げるにも、彼らの言い分があります。行動の裏には、何かしらの考えがあります。でも、人にお願する時などは、失礼にならないように緩くなったスポンをあげている姿があり、可愛いものです。子ども達の持つ道理に間違ったところがあれば、知らずに過ぎないよう教えないければと思います。物に当たるような子どもも、声をかけると笑顔が返ってきます。人間は何か満ちていたいのです。時に自分で自分を満たそうとして方法を間違える子

どもがいます。冷えた心や体で判断を鈍らせた結果に違いありません。身体の方は個々に話をしています。

子ども達にもっと自分を好きになつてほしいのです。悪いことをした時は悟らせながら、自分の良さに気づかせ今の自分のすべてを認めてほしいのです。

縁あって、ここ東中で320名の子どもたちに出会いました。新任も研修会などで学ばせていただきました。学校をあげる度に「いかに子ども達に必要とされるか」を問いかけている自分があります。

編集後記

本号では「一年を振り返って」を中心に、研究・研修報告を含めて編集させていただきました。ご多用中、原稿をお寄せ下さった先生方、有り難うございました。

(山浦・竹田)